

を求めての「会員の声」にも重点をおき、本来の目的の達成をめざす取敢えずの方向づけが考慮されている。しかし本誌が真に読者の要望に応え、特徴ある有益なものとなるため、これらの問題に関心のある諸方面の方々の意見を出来る丈積極的にくみ上げ、また本研究会の各種企画・行事と直結してより充実した内容のものとするための努力が続けられ、我が国のかかえるエネルギー・資源に関する困難な問題の解決と当該技術の促進に少しでも役立つものとなることを心から切望する。

「真実を書こう」

京都大学工学部化学工学科教授

水 科 篤 郎



世にエネルギー危機が叫ばれているが、一般の人々はそれほど切実には感じていない。巷には「石油がなければ、太陽があるさ」的な樂觀ムードが流れている。研究者にも、思いつきか、人まねかであるプロセスの開発を始めると、自己過信か、研究費を得るためか、過大宣伝をする人がある。

マスコミも、無知からか、オプティミスティックな記事でないと売れないためか、この研究をオーバーに紹介し、エネルギー危機は克服されたようなことをいう。

一般の人は、特に日本人は、マスコミのいうことは鵜呑みにして信ずる癖がある。

例えば、現在開発されている、太陽エネルギー利用プロセスの中には、耐用年限30年の装置を作るために、その装置で得られるエネルギーの35年分が必要のものもあるという。このようにエネルギー収支のひきあわぬものは別として、現段階で経済的にペイしないプロセスに対して「エネルギーがもっと高くなれば、ひきあうようになります」という説明はよく聞かすが、永久にエネルギーインフレが続くならその議論もなりたつが、エネルギーが高くなれば、その装置の値段も高くなる事を忘れている。

本誌の創刊にあたって、筆者の望みたいことは、本誌ぐらいいはせめて本当のことを正直に書く雑誌でありたいということである。それが、専門家集団である、われわれの務めであり、真実を述べあってこそ、エネルギー危機を本当に乗切れると信ずるからである。